Print: ISSN 2432-5708
Online: ISSN 2433-9830

東京外国語大学　国際日本学研究プログラム—文部科学省「国立大学の機能強化」事業—
TUFS Program for Japan Studies in Global Context,
supported by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology(MEXT)

東京外国語大学 国際日本学研究 報告Ⅲ

CAAS&NINJAL ユニット 合同セミナー 2017 「言語・表象・歷史」

CAAS&NINJAL Joint Seminar 2017: Language, Representation, History

東京外国語大学 大学院
国際日本学研究院
Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies

Print: ISSN 2432-5708
Online: ISSN 2433-9830

東京外国語大学　国際日本学研究プログラム—文部科学省「国立大学の機能強化」事業—
TUFS Program for Japan Studies in Global Context,
supported by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology(MEXT)

東京外国語大学 国際日本学研究 報告Ⅲ

CAAS&NINJAL ユニット 合同セミナー 2017 「言語・表象・歴史」

CAAS&NINJAL Joint Seminar 2017: Language, Representation, History

東京外国語大学 大学院
国際日本学研究院
Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies

―ごあいさつ―

東京外国語大学国際日本学研究院では、国際日本研究の推進をめざして様々な取り組みを行っています。その一環として、他機関に所属する国内外の優れた日本研究者たちを招致し、幅と厚みのある日本研究を協働して行うことを目的として「CAAS ユニット」「NINJAL ユニット」が発足しました。CAAS（Consortium for Asian and African Studies ／アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム）とは、本学を含め現在までのところ海外の 7 機関（コロンビア大学［米国］、フランス国立東洋言語文化学院［フランス］、ライデン大学［オランダ］、シンガポール国立大学人文社会学部［シンガポール］、ロンドン大学 SOAS［英国］、韓国外国語大学［韓国］、上海外国語大学［中国］）を構成校とするコンソーシアムであり、NINJAL（National Institute for Japanese Language and Linguistics 国立国語研究所）とは、日本における日本語研究の中核として、国内外で大きな役割を果たしている機関です。これら諸機関の日本研究者を本研究院にお招きし、研究と大学院教育を行っていただくというのが CAAS ユニット、NINJAL ユニットです。

2017 年度、国際日本学研究院では、CAAS ユニット、NINJAL ユニットの協力のもと、両ユニット教員および本学教員による CAAS ＆ NINJAL 合同セミナーを前年度にひきつづき実施しました。本書はその合同セミナーとして行われた冬学期集中講義（I 日程：2018 年 1 月 23 日～ 1 月 26 日) における各講義のサマリーを取りまとめたものです。「言語・表象・歴史」という統一テーマのもと、以下のサブテーマをめぐって、各日 2 ～ 3 人の教員による講義が行われました。

1/23 「文化の境界とクレオール言語」
1/24 「表象と（生）政治 Visuality and (Bio-)Politics」
1/25 「琉球・奄美の言語、歴史、日本語史」
1/26 「戦後日本文化と三島由紀夫」

本書の作成にあたり、ご協力いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。本合同セミナーおよび本書を通して、〈国際日本学〉をめぐる教育および共同研究の発展に多少とも寄与できればと考えています。

2018 年 3 月
東京外国語大学　大学院国際日本学研究院
友常勉

東京外国語大学 国際日本学研究 報告III

CAAS&NINJAL ユニット合同セミナー 2017「言語・表象・歴史」

Contents

ごあいさつ　友常勉

＜第1日　文化の境界とクレオール言語＞

越境した日本語と日本文化　朝日祥之 1

韓日説話から見た文化の境界　文明載 3

＜第2日　表象と（生）政治 Visuality and (Bio-)Politics＞

Troubling bodies on the silver screen: The politics of representing female bodies in film　Iris Haukamp 5

Visuality and biopolitics: Representing occupational health in poster campaign　Bernard Thomann 11

＜質＞か＜量＞か―20世紀初頭日本の人口論争―　春名展生 13

＜第3日　琉球・奄美の言語、歴史、日本語史＞

奄美・沖縄の言語研究から―奄美語のEvidentiality（証拠性）―　木部暢子 15

日本語教育は危機言語教育に寄与できるか　花薗 悟 17

万葉集のコーパスと琉球の言葉　小木曽智信 21

奄美の葬送をめぐって――南島文化・文学論　友常勉 23

＜第4日　琉球・奄美の言語、歴史、日本語史＞

表象としての同性愛――『仮面の告白』とLGBT　柴田勝二 27

Mr. Heibon Punch and Mr International: Mishima as a‘MAD’Man　Martyn Smith 29

越境した日本語と日本文化

朝日祥之（国立国語研究所）

0．はじめに

本稿は、東京外国語大学にて開催された2017年度冬学期CAAS/NINJAL合同セミナー「言語・表層・文化」で著者が担当した講義「越境した日本語と日本文化」の報告を行う。以下では、1節で本講義の構成を示し、2節でそれぞれの内容を概説する。

1．本講義の構成

本講義の題目でキーワードとなる日本語と日本文化の持つ「越境性」を取り上げ、それが持つ意味を、次にあげる４つの視点から考察した。

(1) どこからどこへの越境なのか
(2) ホスト社会における言語レベルの接触・変容
(3) クレオール（コイネー）形成とその特性
(4) 文化接触による事象

2．4つの視点の概要

2．1．どこからどこへの越境か

人の移動による越境が生じるとき、さまざまな移動範囲を設定することができる。例えば、

(1) 近隣地域（近隣学区）への移動
(2) 国内の移動（東京から大阪、大阪から福岡など）
(3) 外地への移動（青森から北海道、沖縄から大阪、東京から満州など）
(4) 海外への移動（広島からハワイ、高知からブラジルなど）

などである。その多くは、転校・進学・就職、転勤、結婚、移住などによるものが多い。別の見方をすれば、農村部から都市部への移動、都市部か島嶼部への移動なども含まれる。それぞれも自由意志によるものから、政策によるもの、集団規模のものから社会制度によるものまで含まれる。

2．2．ホスト社会における言語レベルの接触・変容

日本から（国内のあるところから）移動してきた人が持ち込んだ言語・方言同士の接触が生じる（このことをdialect transplantation（Trudgill, Peter (1986) *Dialects in Contact*. Oxford: Blackwell）と呼ぶ)。言語または方言同士の接触によって、次の４つの現象が生じるとされる。

(1) 日本語方言間による方言接触による変容

(2) 現地語との接触による変容
(3) コード切り替え
(4) リンガフランカの形成

２．３．クレオール（コイネー）形成とその特性

クレオール（コイネー）はそれぞれ言語接触（または方言接触）により形成された新しい言語（であり方言）である。日本語の場合，クレオールが形成されるケースは世界的に見てもほとんどない。台湾での報告（宜蘭クレオール）はある。一方、コイネーは東京語・北海道内陸部方言などでは見られる。海外の日本語方言の場合は，コイネーが確立したケースはほとんどない。

２．４．文化接触による事象

文化接触による事象は、食に関する事例を取り上げた。例えば、ブラジルで生産される醤油（SAKURA SHOYU）や日本酒（AZUMA KIRIN）などである。この他にも、misso（味噌）、musubi（おにぎり）なども取り上げた。

まとめ

本講義では、越境した日本語と日本文化を取り上げた。そこから、ホスト社会における言語文化接触による変容をさまざまなレベルで確認した。変容の仕方としては，現地語へのシフトが一般的である一方で、その具体的なプロセスには現地社会に特有のものがあることが確認された。その意味でも現地の日本語日本文化は変容し続ける。

なお、日本国内への人の移動による変容も生じている。それらの持つ時代性・社会性などを十分に加味した上で、これから生じていく現象を捉えていく必要がある。その意味においても基礎調査・基礎研究が果たす役割は大きい。

韓日説話から見た文化の境界

文明載（韓国外国語大学）

Ⅰ　はじめに

古代の韓国と日本の間では活発な交流があっただけに、両国の説話の中には類似した話が多い。したがって説話研究においても比較研究が必要であり、なおかつ有効な方法の一つになろうと思う。また、他のジャンルの文学作品とは異なる説話の特性を考えると、比較研究においては多様な視角からの接近が望ましいと思われる。

Ⅱ　仏典による説話の共有

韓日昔話の中には、何のうたがいもなく自国固有のものと思い込んできた話が数多くあって驚かされるが、韓日の文献から三つの話を取り上げて考えてみることにする。

【例話１】『今昔物語集』巻５第 13 話「三獣、菩薩の道を修行し、兎が身を焼く語」
【例話２】『今昔物語集』巻５第 25 話「亀、猿のために謀られる語」
【例話３】『三国史記』巻第 41　列伝第１「金庾信 上」

これらの例話はすべて釈迦の本生談（ジャータカ）である。この事実を手掛かりに考えてみると、韓国や日本が同じ発想や話を共有するようになった理由は、実は仏教の伝来であったのである。一般的に仏教の伝来というと抽象的な思想とか仏の教えの伝来を思い浮かべがちであるが、実際には具体的なかたちで伝わる。仏・法・僧の三宝、即ち仏像と経典と僧侶という、非常に具体的なかたちで仏教の伝来が行われているのである。そしてインドの地で発生した仏教が中国、韓国、日本を一つの伝播ルートにしていることも周知の通りである。要するに、『三国史記』や『今昔』の中の兎や猿は釈迦の前生のすがたであり、仏教の伝来とともにこれらの話を載せる経典も伝わってきたから、仏教伝来において同じ経路に属する韓国や日本が同じ話や発想を享受することができたと言えよう。

Ⅲ　仏教の孝の共有

次は、『三国遺事』の真定師と母親の往生談（巻 5、第 9 孝善篇、第 1 話）と『今昔物語集』の源信僧都の母の話（巻 15 第 39 話）を比べてみ、話の底に流れている儒教と仏教の孝について考えてみた 。儒仏の代表的な経典の説く孝の概念を例の二話に照らし合わせてみると、真定の母に仕える態度とか老いた母のことを案じて出家しないこと、そして源信が王室法会の講師になるほど立派な名僧になって宮からの供物を母のもとに届けてあげたことなどは、いわば儒教的な孝の

実践であった。しかし、二人の息子たちとは対照的に、真定の出家を急ぐ母の心、また源信が聖人となって自分の来世を助けてもらいたいという母の言葉、そして最終的には二人の母がともに往生を遂げた、という話の底に流れているのは仏教で説く孝の世界であったのである。

Ⅳ　むすびに代えて

以上、韓国の『三国史記』と『三国遺事』、日本の『今昔』を対象とし、両国の文献説話の比較を試みてみた。仏典による共有説話は、当然のことながら内容的に酷似しており、仏教の影響があらためて感じられる。また、真定と源信の母の往生をとおしては、内容は全く違う話であるが、その根底を成している共通の理念として仏教の孝が指摘された。これまた当時の両国民がいかに類似した精神世界のもとで生きてきたかを物語ってくれる。

説話の中には当時の人々の姿が生き生きと刻まれており、生きた歴史と言っても差し支えない。したがって、文献説話の比較考察は、当時の人々の精神世界を理解するための大きな可能性を有すると思われる。今日の話は類似性を確認することにとどまったが、当然説話が越境する際は相違も付き物であり、その相違を明らかにすることも大事であることは言うまでもない。

Visuality and biopolitics: Representing occupational health in poster campaign

Bernard Thomann（フランス国立東洋言語文化大学 [INALCO]）

Visual representation of health is present during the Edo period with, for example, *Nishiki-e* explaining the mechanisms of digestion, or other bodily functions. Education in good nutrition was then primarily intended for educated populations who conceived hygiene as an individual discipline intended to lengthen life.

After Japan opened in 1854, visual representations in the form of prints or posters reflected the threat of infectious diseases. These illustrations are intended for the general public. They illustrate the development of "biopolitics" that considers the population as the main source of national power. Hygiene is no longer an individual discipline, but a collective discipline, central in the process of building a modern nation-state. The posters give practical advice to prevent the spread of epidemics such as cholera. Prints represent the threat of these epidemics in the form of frightening animals but also of foreign armies that must be repelled by the means that bacteriology, newly introduced, makes available to the authorities. In these illustrations, the population is often called upon to abandon its old beliefs and adopt modern hygiene methods.

With the industrial take-off of Japan from the second half of the Meiji era, industrial hygiene gradually established itself as one of the most important dimensions of public health. According to a hygienist like Gotô Shinpei, effective national hygiene can only be adopted if it is accompanied by improved hygiene in factories and mines.

A particularly rich iconography develops from WWI under the action of an organization such as the Sangô fukuri kyôkai (Society for Industrial Welfare) created and financed by the Home Ministry. The posters, stuck in the workplace develop a number of themes that reflect both the introduction of new labour management technology, such as the scientific organization of labor or the sciences of labor, but also social developments. Germs continue to be referred to as enemies. Workers are discouraged from spitting or coughing. Wearing a mask is encouraged. Workers are encouraged to clean up the workplace regularly. But if the worker is encouraged to take care of his body, it is because, with the development of the physiology of work, a good physical condition becomes the condition of an increase in productivity. Thus, from the 1920s, companies began to introduce compulsory gymnastics in the morning. Illustrations explaining the exercises to be performed are published in specialized magazines.

Many posters also aim to reduce workplace accidents. Work accidents are presented as the result of careless conduct on the part of the worker or his inattention. As a familialist discourse appears parallel to

the progression of the male bread winner model, the worker is called not to be injured because he is responsible for the survival of his wife and children. Women are the subject of special representations. They are warned against feminine brands such as hair accessories or long nails that are presented as sources of accidents. Poster campaigns are particularly intense during national safety weeks, but the slogan "anzen dai ichi" (security first) is displayed permanently in almost all factories, mines and construction sites. Prevention posters against toxic environments, such as chemicals or dust, feature protective equipment and martial metaphors. The worker must wear his protective mask as the samurai wore his helmet and as the soldier wears his gas mask. This metaphor is not only symbolic. Indeed, since the First World War, research on chemical weapons and protection against toxic substances has been linked.

Sangyo fukuri kyôkai's poster campaigns are not limited to behaviour in the workplace. Workers are encouraged to avoid accidents on the way home and to dress sufficiently while sleeping. Rest is considered an important element of productivity growth. This search for labour productivity is also associated with nutrition, on which intensive research is being developed, thanks to the labour sciences and because Japan is considered to be in a situation of overpopulation. On the posters, workers are usually asked not to eat or drink too much.

The introduction of radiography greatly influenced the representation of workers' bodies. Radiograph-inspired images of the lungs can be found in a bulletin published by Japan's miners' union, which educates workers about the threat of silicosis. After the war, the development of occupational accident insurance stimulated a new type of representation of the body. The members are represented as associates with levels of financial compensation in the event of an accident at work. In the guides written to help workers to compile financial compensation claims, or in occupational accident reports, the body is then represented in a very schematic way, and reduced to the monetary value of its parts.

＜質＞か＜量＞か
―20世紀初頭日本の人口論争―

春名展生（東京外国語大学 大学院国際日本学研究院）

はじめに

出生前診断や遺伝子検査など、人口の＜質＞を向上させるための技術が飛躍的な進歩を遂げるなか、優生学、すなわち人口の質的な改善を目指した思想・運動がたどってきた歴史に急速に関心が高まっている。

日本で「優生学」を明示的に掲げ、その普及を意図した運動が活発化したのは1920年代であり、ついに1940年には「国民優生法」と「優生」を名に冠した法律が制定されるに至った。しかし、その法には「故なく生殖を不能ならしむる手術又は放射線照射は之を行ふことを得ず」（第15条）と明記され、翌年に閣議決定された「人口政策確立要綱」にも、人口の「資質の飛躍的なる向上」が唱えられる一方で、やはり「避妊、堕胎等の人為的産児制限を禁止防遏する」と書かれている。このように人口の＜量＞が重視されるのは、戦時中としては当然かもしれない。

しかし、1920年代にまで遡っても、じつは同様に＜質＞の改善と並行して＜量＞の減少が生ずる恐れに懸念が表明されていた。たとえば、1926年に日本優生運動協会を立ち上げた池田林儀（しげのり）は、「人口と生活資料との均衡をとるなどと称して、みだりに人口の数字的調節をやつたならば、それこそ他の民族の生存力に侵されるばかりである」（『応用優生学と妊娠調節』、1926年）と自著に記している。

本講義では、戦前期の日本で、優生学的な施策の全面的な展開を押さえるほど、人口の＜量＞の減少に対して警戒感が強かった理由を問う。

1．「過剰人口」論の形成

戦前の日本で＜量＞の減少に懸念が表明されているのは、当時の社会情勢に照らすと奇異な感を抱かされる。というのも、日本では、19世紀の終盤から人口の「過剰」が叫ばれていたからである。たとえば、1891年に創立された海外移住同志会の設立趣意書には、「限りある国土の面積を以て限りなき人口の繁殖を致す」ため、「今や我国は人口処分の大問題に上れり」と書かれている。その三年後、日清戦争中に出版された徳富蘇峰の『大日本膨脹論』（1894年）でも、人口の過剰を理由に版図の拡張が主張されている。人口の増え方に照らし、「今後六十年に於ては、日本国の面積を二倍するにあらざるよりは、今日に於ける人口と面積との比例を保つ能（あた）はざる也」と蘇峰はいう。早期の日露開戦を訴えた「七博士」の一部にも、同様の論理を振りかざす者がいた。いわゆる「七博士」とは、開戦前の1903年6月に、首相の桂太郎や山県有朋らに連名で建白書を送った七人である。その領袖として活躍した東京帝国大学教授の戸水寛人は、「日本は段々人口も殖えて来る年に五十万人も殖えるといふことであるから、都合の好い処へ殖民せさるか然（しか）らざれば領土を拡張するより外はなからうと思ひます」（『回顧録』、1904年）と語っていた。

２.「過剰」のなかの増殖

それでは、なぜ人口が「過剰」と見なされていたにもかかわらず、さらなる人口の増加が必要とされたのであろうか。ここでは、この矛盾に明快な説明を与えていた建部遯吾の議論を紹介する。建部は、東京帝国大学教授で社会学講座の担任者であった。

じつは建部も、建白書の提出後に編まれた『日露開戦論纂』(1903年) に寄稿するかたちで「七博士」の運動に関与していたが、その際に建部は「最早日本帝国の人口増加率、即物理学上に謂ふ所の加速度に於ては既に進が止つて居る」と書いていた。要するに建部は、すでに日本の人口は「過剰」と言われていたなか、一段と急速な人口の増加を望んでいたのである。その理由として、建部は国家間の競争関係を指摘する。「他の方では互に人口を増やそうとする増して行かうと云ふのに、一方に於いてだけ人口を制限しやうと云ふことになると、制限策を執つたものは段々押付けられて、遂に絶えて行くの外は無い」と建部は説く。

世界各国が競うように人口の増加に努めれば、いつかは地球が飽和に達するであろう。建部は、いずれ「地球上に於いて是れ以上人口を容れ得ないと云ふ時が、一遍は来るに相違ない」と考えていた。それゆえにこそ、その時点までは人口の増加に励む必要があると建部は訴えたのである。「少くも十億の人口を維持すること能はずんば、我国は乃ち一等国に非ず」と建部は危機感をあおった（「人口問題」『日本社会学院年報』3巻、1916年）

３．＜質＞の向上より＜量＞の拡大

当然ながら、建部は産児制限の思想を認めなかった。アメリカで産児制限運動を主導していたマーガレット・サンガー（Margaret Sanger）の来日に際しては、それがアメリカの策謀ではないかと建部は批判した。日本で産児制限が普及すれば、それは「米国といはず何国といはず、すべて国運競争をする諸外国に取つて勝敗の上から利益であり、手短に申せば「勝利」である」からである（「多数政治と軍国主義」『大正公論』4巻、1924年）。

その建部は、優生学にも疑いの眼差しを向けていた。＜質＞の向上を過信して＜量＞を等閑視するのは「将校の優良を欲して、下士卒を減少することを犠牲にせんとする類」にほかならないと建部は懸念を示している（『食糧問題』、1925年）。

おわりに

建部は、自ら立ち上げた日本社会学院をつうじて、以上のような自説を多方面に広めていた。1926年に「産めよ殖えよ」と題する小論を書いて波紋を呼んだ高田保馬も、この学会に深く関与していた一人である。高田の意見を端緒として日本の人口をめぐって論争が勃発するが、そのなかで各界の人士から産児制限に対して反対の意見が上がっている。そして、1927年に政府によって人口食糧問題調査会が設置され、そこで「人口統制」が議論された際、殊更に「所謂産児制限と異り必ずしも人口数の制限を意味するものに非ず」と明記されなければならなかったのである（『人口食糧問題人口部答申説明』、1930年）。

奄美・沖縄の言語研究から
―奄美語のEvidentiality（証拠性）―

木部暢子（国立国語研究所）

1. はじめに
2. Evidentiality（証拠性）とは
3. 与論島方言のEvidentiality（証拠性）
4. 奄美加計呂麻島方言のEvidentiality（証拠性）
5. 奄美大島名瀬方言のEvidentiality（証拠性）
6. 九州方言のアスペクトと奄美方言のEvidentiality（証拠性）
7. 古典語のEvidentiality（証拠性）

与論島方言では，「太郎は海へ行った」の，「行った」に当たる表現にイキュータン（ikjuutaɴ）とイジャン（iʑaɴ）の２つがある。話者の説明によると，イキュータンとイジャンには，次のような違いがあるという。

(1) タローヤ　ウンカティ　イキュータン。　…… 話者が目撃したことを言う。
　太郎 は　海　へ　行った（行きおった）。
(2) タローヤ　ウンカティ　イジャン。　…… 単に過去の事実を言う。
　太郎 は…　海　へ　行った。
(3) ワナー　ウンカティ　イジャン。　…… 話者の過去の体験の事実を言う。
　私 は　海　へ　行った。

（菊秀史『与論の言葉で話そう（２）』p.5）

イキュータンとイジャンの違いのポイントは，(a)「話者が目撃したこと」の報告か，それとも「単なる事実」の報告かという違いであること，(b)主語（動作主）が第一人称のときにはイジャンしか使えないということである。だとすると，イキュータンとイジャンの違いは，Evidentiality（証拠性，証拠様態）と呼ばれている現象にあたるのではないか。

Evidentiality（証拠性）とは何か。Alexandra Y. Aikhenvald (2003) は次のように述べている。

(4) In a number of languages, the nature of the evidence on which a statement is based must be specified for every statement-whether the speaker saw it, or heard it, or inferred it from indirect evidence, or learnt it from someone else. This grammatical category, referring to an information source, is called 'evidentiality'. (p.1)

また，工藤 (2004) は，次のように述べている。

(5) <証拠性(evidentiality)>：話し手が伝える情報のソースを明示する文法的カテゴリー。direct evidenceとindirect evidenceがある。様々な言語で,<人称>と相関することや,パーフェクトからも発展することが指摘されている。(p.33)

与論島方言のイキュータンとイジャンをこれに対応させてみると，イキュータンは「話者が直接目撃したこと」(the speaker saw it / direct evidence) を報告する形であり，イジャンは「話者が直接には目撃していないこと，単なる過去の事実」(the speaker inferred it from indirect evidence, or learnt it from someone else / indirect evidence) を報告する形のように思える。主語 (動作主) が第一人称の場合にindirect evidenceの形であるイジャンが使われるのは，話者は自分自身の動作を直接見たり聞いたりすることができないためである。

与論島方言では，過去形だけでなく非過去形にも２種類の形がある。(6)はdirect evidenceの表現,(7) はindirect evidenceの表現といってよい。

(6) 前方から太郎が歩いてくるのを見て
アッ　アマカラ　　タローガ　{キュイ。／*キュン。}
あっ　向こうから　太郎が　　来る。　(p.4)
(7) 五時に来ると行っていた太郎が七時にしか来なかったことを聞き手に話す場合
タローヤダー　　ゴジンヤ　　キュンチュタルムヌ　シチジナティ　キュン。
太郎は さあ　　五時には　　来ると言ったのに　　七時になって　来おる。(p.152)

また, 形容詞にも２種類の終止形が現れる。形容詞の場合，２種類の終止形は, 一時的な状態 (actual) と恒常的な状態 (potential) に対応している。例えば，次のような例がある。

(8) a. 会社に遅れそうになったので朝食を取らずに出勤し，勤務中，ひもじい思いした。
翌日，同僚に「やっぱり朝食を食べないとお腹がすく」と言う→ヨーシャイ
b. 朝食を食べずに登校しようとする子どもに親が「食べないとお腹がすく」と言う
→ヨーシャン (第４巻 p.42)

形容詞におけるactualとpotentialの用法は，動詞のdirect evidenceとindirect evidenceの延長線上にあると考えることができる。

授業ではこのほか, 奄美加計呂麻島方言の～jur形と～jum形, 奄美大島名瀬方言の～ri形と～ŋ形, 九州方言のアスペクト形式ヨルとトル，古典語の「めり」と「なり」のevidentialityについても触れた。

日本語教育は危機言語教育に寄与できるか

花薗悟（東京外国語大学 大学院国際日本学研究院）

１．はじめに

・沖縄語に対する興味：博士論文執筆中

・2011 年から沖縄語の学習開始

→なかなか上達しない→教科書を作り教えてみればうまくなるのでは？→教科書づくりに着手（科研費の取得：2013 年～）→学部での開講と試用：2017 年～

２．初級日本語の教授法

・文型積み上げ式：既習の知識に、単語と文法を少しずつ加えていく

名詞文→形容詞文→動詞文→…→動詞の活用→動詞のさまざまな形…→条件→…→受身・使役→…→敬語

「Ｎ１はＮ２です」「ＮはＶます」→…活用→…テイル、テミル…→～タラ…→～ラレル、サセル→オ～ニナル etc

※簡単なことから始め、だんだんと複雑なことがいえるようにする。　　cf. 直接（教授）法

・文型の選定や提出提出におけるさまざまな工夫

例１ 類義の形式が存在するものについてはひとつずつ提出し、それが定着したころに次のものを出す（例　推量「(し）そうだ」「ようだ」「らしい」「(する）そうだ」)。

例２ 条件文（「～と」「～ば」「～たら」「～なら」）は主文が非過去形のもののみを扱う

例３「は」と「が」の使い分け、「のだ」など日常的によく使われる形式であっても身につけにくいものは項目の紹介だけにしてあまり深く追求しない（「上手に隠す」）

→沖縄語の入門書をこのように組みなおしてみてはどうか？

３.「初級沖縄語入門」

３．１．想定する学習者

想定：対象・大学生　・学生：8 人～ 10 人程度が理想　・前期と後期で 30 回（外大では 26 回）

到達レベルの目標：日本語能力試験（JLPT）Ｎ４レベル

JLPT:Ｎ４［聞く］「日常的な場面で、ややゆっくりと話される会話であれば、内容がほぼ理解できる」

cf. 狩俣繁久氏 (琉球大学)「(琉球大で行っている沖縄語の授業の目標は）公設市場でオバーと会話ができるレベル」

※首里方言をベース：丁寧体と普通体の対立→初級日本語教育の方法論が適用しやすい

３．２．基本的な方針

・2 でみた文型積み上げ式

・実際のコミュニケーションに疑似的にでも近づける

「私は少年です」「これはペンですか？」：実際には使わない？このようなやり取りはおもしろくない

→　「～さんの趣味はなんですか」

「～さんの家はどこですか」

「～さんのおとうさんは何歳ですか？」

・学生の発話量を多くする→学生全体：個々の学生：教師＝［理想的には］７：２：１（ある日本語教師の言葉）

→　「外国語」でコミュニケーションする楽しさを味わえる工夫

・授業の実際から

① ウレー　ヌー　ヤイビーガ（だまし絵を用いて）

② ＮヌＮ（生産国）：外国の製品（ビールの缶など）を当てさせる

③ ＮヌＮ（言語）：諸言語のハリーポッターを渡して

④ ＮヌＮ（所有者）：学生も持っているものを集めて Q & A

cf. さまざまな教室活動（日本語教育、英語教育にはさまざまな蓄積がある）

※最初の目標として通じることを目標とする。cf. 声門破裂音などの扱い

４．初級日本語教育との違い

・言語としては別：似ているが明らかに異なる点もある　→　いくつかの点で工夫が必要

・主題の形Ｎヤ（「～は」）：日本語では「は」をつけるだけだが、沖縄語では複雑

(1)チラ[顔]　cira→ciraa　チラー［顔は］　(-a→-aa）ア段でおわる音→「アー」
(2)アリ[あれ]?ari→?aree　アレー［あれは］(-i→ee)　イ段でおわる音→エ段の長音
(3)ッチュ[人]Qcu→Qcoo ッチョー［人は］(-u→oo)　ウ段でおわる音→オ段の長音

(4)チュー［今日］cuu→cuu-ya　チューヤ［きょうは］(-ー→ーya）長音にはヤ

(5)～サン［～さん］～saN　→～sanoo ヤマダサノー［山田さんは］　(-N→noo)

例外：ワン［私］waN→　waNnee　ワンネー［私は］

→ 2 課に回す：1 課ではＮヤは「ワンネー」「～サノー（～さんは)」「ウレー」「アレー」のみ。

名詞文の否定Ｎヤ アイビラン（「Ｎではありません」）も「主題の形＋アイビラン」のため 2 課で扱う、など

５.まとめ

５．１．この方法の利点

・文法（文型）・語彙を体系的に学ぶことができる

・やったところまででも使える（1 課 [名詞文] だけでも言えることはたくさんある）

５．２．期待される効果

・沖縄語の継承教育

・日本語（外国語）教師志望者のために：日本語（外国語）学習の「疑似体験」として（沖縄語は習得が比較的容易［文法・語彙の類似性、発音も”通じるレベル”なら難しくない］，直接法で出来ればさらに良い）

５．３．問題と展望

・研究が十分でない事項をどう教えるか？（指示語、質問法とナーとのちがい、動詞のティ形とアーニ形…）

・しかし、このような教授法により新たな問題の発見～研究へとつながる可能性もあるのでは？

cf 日本語教育の日本語研究への寄与

万葉集のコーパスと琉球の言葉

小木曽智信（国立国語研究所）

『日本語歴史コーパス』と『万葉集』

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」において、奈良時代から明治・大正時代までの日本語の歴史をたどることのできる言語の用例データベース『日本語歴史コーパス』の構築を行っている。このコーパスでは、全てのテキストに読み・品詞などの単語情報が付与されているため、従来の紙の索引の代わりになるだけでなく、より高度な検索や集計を行うことができる。また、底本や原文画像などにリンクしており当該箇所の現代語訳や原本画像を確認することができるようになっている。このコーパスを構成するサブコーパスとして、すでに、平安時代の仮名文学作品、鎌倉時代の説話・随筆、日記・紀行、室町時代の狂言、さらに明治・大正時代の雑誌などが公開され、日本語史研究の資料として広く使われつつある。2017年10月に、この中に「万葉集」（奈良時代編Ｉ）が加わった。

『万葉集』とそのコーパス

「万葉集」は周知の通り奈良時代に作られた我が国最古の歌集であり、まとまった量のある日本語の資料として最古のものである。段階的に、8世紀半ば以降に成立したと考えられ、中には6, 7世紀から8世紀までの歌が含まれている。原本は失われ、平安時代中期以降の写本が残る（最古の写本は桂本、巻第四のみ）が、全巻揃ったものは鎌倉時代後期（西本願寺本）のものである。これらの古写本は「万葉集校本データベース」（https://www.manyou.gr.jp/MAN_1/）で確認することができる。

万葉仮名と上代特殊仮名遣い

万葉集は平仮名・片仮名の成立以前に書かれたため、漢字のみを用いた万葉仮名によって日本語が表記されている。万葉仮名のうち、一字一音を表す仮名の使われ方に次のような法則性があり、キヒミケヘメコソトノモヨロの万葉仮名が2種類に使い分けられていることが知られている。

キ甲類　支・吉・岐・来・棄　→「君」「秋」など
キ乙類　己・紀・記・忌・氣　→「霧」「月」など

このことは既に江戸時代には、本居宣長によって気づかれ、石塚龍麿によって『仮名遣奥山路』（1798）にまとめられているが、後に 橋本進吉によって「上代特殊仮名遣い」と名付けられた。この使い分けは音韻上の違いによるものと考えられている。

このように、万葉仮名の原文でいかに書かれているかは、日本語研究にとって大きな意味を持つ。一方、読解のためには漢字仮名交じり文の方が望ましい。そのため『日本語歴史コーパス』の

万葉集では単語情報が付与された校訂済みの読み下し本文と、万葉仮名原文とが単語単位で関連付けて利用できるようになっている。

ONCOJ（Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese）

『日本語歴史コーパス』には単語の情報が付与されているが、統語情報は付与されていない。そのため、文法関係の検索には限界がある。また、本文は漢字仮名交じりであるため、音素レベルでの検索指定はできない。それに対し、オックスフォード大学のフレレスビッグ教授らが開発した”Oxford Corpus of Old Japanese”（OCOJ）はローマ字本文をベーストとして統語情報を付与したコーパスである。オックスフォード大学と国語研究所が共同で、このコーパスをさらに発展させ、検索インターフェイスとともに公開したのがONCOJ（http://oncoj.ninjal.ac.jp/）である。ONCOJから『日本語歴史コーパス』の万葉集へのリンクもあり、双方を組み合わせて利用することでより柔軟に、情報を組み合わせた研究が可能となっている。

琉球の言葉と『万葉集』

万葉集の8世紀以前の日本語と琉球の言葉を結びつけるのはやや突飛な見方と思われるかもしれないが、日本語と琉球の言葉は古い時代に分岐したと考えられているため、その時期を探る上で、このことは重要なテーマとなっている。

上田万年（1898）「P音考」は、上代（奈良時代以前）の日本語のハ行音が、現在のようなHではなくPの音であったことを論じたものである。清音と濁音との音韻的関係や文献学的証拠、アイヌ語に入った日本語などを傍証とした、近代的日本語研究の嚆矢といえる研究成果であるが、この中で、「又かの沖縄薩摩等、九州の南部にかけてF音の多く存在することを認むるのみか、沖縄語典の吾人に告くる處によれば、國頭八重山宮古の諸島には、半濁音の語極めて多しといふなれば、此等の上より見ても、現在流行の音かP Ph (F) H Wの轉遷をなし來りし事、昭々たるにあらずや。」（原文ママ）と述べ、琉球のP音が上代日本語の音を残したものである可能性について論じている。

二つの言語がいつごろ分岐したかを探る古典的な研究としてスワデシュの言語年代学がある。基本語彙の変化の大きさが一定であると仮定して、基礎語彙の一致率から分岐の時期を探るものである。前提に問題があり実際の適用には困難が大きいが、この方法でも日本語と琉球の言葉の分岐は奈良時代ごろとされることが多いようである。万葉集の言葉はこうした研究でも重要な資料となる。なお、スワデシュと同じようなアイデアは、寺田寅彦（1928）「比較言語学における統計的研究法の可能性について」が早く指摘している。

近年の研究では、田窪行則・ジョンホイットマン・平子達也編（2016）『琉球諸語と古代日本語日琉祖語の再建にむけて』（くろしお出版）所収のトマ・ペラール「日琉祖語の分岐年代」がある。琉球各地の言葉と、文献から得られる過去の日本語の資料から分岐年代を探っている。

このように、日本語の最古の資料である万葉集は、琉球語と日本語との関係を探るためにもきわめて重要な資料となっている。

奄美の葬送をめぐって――南島文化･文学論

友常勉（東京外国語大学 大学院国際日本学研究院）

本セミナーの報告では、奄美の郷土史家であった山下文武氏の研究をひとつの指針として奄美・南島研究を考えるために、2つのテーマ（「葬送儀礼」と「入墨習慣」）を検討した。

1　本学の奄美研究の発端と「当済文庫」

まず山下文武氏と東京外国語大学院国際日本学研究院が所蔵する奄美資料の来歴を述べておきたい。

山下文武氏は、1926年（大正15）鹿児島県大島郡住用村（当時）生まれ（2018年逝去）。東洋大学文学部史学科日本史専攻を1960年に卒業、1948年から1953年まで、復帰前の琉球政府立奄美博物館で勤務、そのあと名瀬市誌編さん委員（1963年-1973年）、大島郡住用村教育長（1974年～1978年）などを歴任。『名瀬市誌』をはじめ、『南西諸島史料集』、『鹿児島県史料』などの奄美関係の史資料の解読筆耕の責を担ってこられた。単著に『嘉永六年の奄美　解説『嶋中御取扱御一冊』』（ひるぎ社、1988年）、『奄美の針突　消えた入墨習俗』（まろうど社、2003年）、『琉球軍記、薩流軍談』（南方新社、2007年）などがある。近世奄美史研究の第一人者であり、民俗・方言研究の分野でも多くの論考を発表されている。

山下氏の所蔵史資料は「当済文庫」と名付けられている。山下氏の母方の先祖に清当済（きよし・とうずみ）という名士がいる。当済は、1744年（延享4年）に南大島を代表する名家に生まれ、島役人として活躍し、1816年（文化13）に亡くなった。清当済の事績の一端は、幕末奄美の風俗・民俗資料として名高い名越左源太『南島雑記』（平凡社東洋文庫に所収）に紹介されている。

当済の名を冠した文庫を構想したのは、やはり当済を祖にもつ師玉厚（1907年-1956年）であった。師玉厚の名前は、みすず書房刊『現代史資料22　台湾2』に収録された「第二次霧社事件資料」の当事者として、「昭和五年拾月起　『日誌』」からはじまる記録の執筆者としてあらわれる。これは、「霧社事件」として知られる、1930年10月に発生した霧社の台湾原住民による台湾総督府の管理下の日本警察に対する蜂起、とりわけ1931年4月に、霧社蜂起鎮圧のあと、霧社討伐に参加した原住民のひとびとが、報復を恐れて、生き残った霧社の原住民を襲撃した「第二霧社事件」の記録である。師玉厚は日本警察の巡査としてこの事件に立ち会っていた。師玉厚は、台湾での赴任時代に、奄美において、子女のための教育機関として、「当済女子団」の設立を構想していた。その教育構想が、復員後に際会した、同じく当済を祖とする山下文武氏との語らいのなかで、史料群としての「当済文庫」の構想につながった。

2　葬式（トムレ）（山下文武調査ノートより）をめぐって

ここでは主に「山下文武調査ノート」（以下、「山下ノート」）から、「泣き女」の習俗と洗骨儀礼に焦点をあてておこなった。紹介した資料は以下である。「奄美の葬送儀礼左に概要を述べん。／1　葬式／イ　葬式の泣き方　死人ありたる場合は家族は勿論親戚人相集り、死人をとり囲んで声をたててなく。なき方に上手、下手あり。上手の泣き方は、何しらぬ人もなかしむる様に如何にも哀れそうになく。「オモリ」と称して、一定の節をつけて歌ふが如くなく事ありき」「此外、地方によりては身分に応じ門閥ある男の場合は、弓、矢、鉄砲、引馬等の供御あり。弓、矢、鉄砲は墓地にて放つ。引馬は多く当家の下男之を御し、往時は7日間　その馬を放ちおけり。途中、近親の女達は声高く節をつけてなき続く。墓地の入口に至りて左廻り三回廻りて墓に入る」「二／葬儀　（イ）死後7日迄は二回近親中墓参をなす。3日、7日、30日（初□）49日の4回葬儀を行う。49日は近親中、墓参後、海水を以て身を浄め忌払いをなす。（ロ）毎月死亡したる日に墓参をなす。（ハ）法会　一年忌、三年忌、七年忌、一三年忌、三三年忌には、餅、酒肴を整え、親族を招待して墓参後、帰家酒宴を開く。三三年忌は最終の祭儀として墓の後に椎の木をたて、之より天にのぼるものとす」(「山下ノート」)

「オモイ：徳之島四方町村共　死人ある時は親類や知己の婦人が集って泣く習慣が今でも残っているが、往昔は「オモイ」といって一種の歌に類する極めて悲哀憂鬱な祈りの詞を涙をふきふき声をそろえて唱ふる儀礼があった」（同上）

「泣き女」習俗は世界各地に残るが、ここでは台湾・福建省などとの差異の検討が必要である。また、洗骨儀礼は、風葬と土葬の中間に位置する儀礼である（木部暢子氏より示唆）。上記二つの事例は、奄美の地政学的位置を見極めた習俗論・文化論からの今後の研究課題として、確認したい。

3　谷川健一の南島文学発生論とハヅキ＝入墨習俗

ここでは、谷川健一〔1921年-2013年〕『南島文学発生論』（思潮社、1991年）が提起した論点を、山下文武氏の研究視角にもとづいて置きなおすことを目的とした。谷川は南島文化・文学の呪謡を以下のように概括している。「…沖縄に鉄器と製鉄技術が伝わったのは、十二、三世紀という事実である。…沖縄の庶民の間では鉄器の欠乏はかなり慢性的な状態でながくつづいたと見なければならない。とうことは庶民の日常生活の多くの部分が石器、木器、貝器などに頼っていたことを意味する。…南島における呪謡の歴史はその起源を明らかにすることができないほど古いが、呪謡は鉄器の到来する以前の社会おいてこそ、その機能を十分に発揮し得るものであった」(10-12)「とはいえ、南島の庶民の中では言葉の力はなおも強力に信じられた。…〔海上交通の疎隔〕…南島の第三の特徴は奄美から八重山にいたるまで、仏教の影響がきわめて希薄であったということである。…仏教の「真言」の効力は神道の「呪言」の力にまさるものと考えられた。…それに対して南島では仏教の影響がほとんどなかったために、言葉の呪力に対する古来の信仰はそのまま温存された」(14)

「人間を取り巻く自然は活きた力をもち、悪意と善意をあわせ備えていた。この危険で反抗的な存在（モノ）を制圧するために、「言問う」相手を打ち負かす言葉のたたかいが必要であった」「言葉の呪力は南島の方言でクチ、フツ、フチなどさまざまに呼ばれ、原始から近代まで幾十世紀ものあいだ受けつがれていった。外部から自分を侵害しようと狙うモノに打撃を与え、自分の立場を有利にみちびく言葉の呪力の中で、もっとも権威があると信じられたのは、巫女の口から発せられる呪言であった」(15)

こうした呪力論にかかわって、一方、山下文武氏が注目したのが、ハヅキ＝入墨習俗であった。結論からいえば、入墨とは第一に魔除けを意味し、第二に、魔除けを介して外部の文明との文化接触・文明接触の緩衝材としての機能を有している。谷川健一の南島文化・文学論が言葉の呪力という高度に抽象的な次元で議論を構成していることに対して、山下の視点はより地政学的であったといえる。

山下『奄美の針突　消えた入墨習俗』（まろうど社、2003）は、小原一夫『沖縄文化叢説』『南嶋入墨考』などを参照して次のような由来を示している。これはけっして明示的な結論をもっているものではないが、山下氏の研究視角の含意を表しているものと理解したい。

1.　昔ある琉球王の時代、大和から来た客が王と対談中に、王が七人の美しい娘をもっておられるのをみて、その中の一人をいただきたいと笑いながら話をした。…しかし王は一人でも姫を下さる気はなく、何とかことわることはできないものかと考えた末、大和の人は入墨をした女を嫌うということを聞いていたので、その人が帰った後七人の娘に入墨をさせた。…島の乙女たちもこれに倣って入墨をするようになり外から来る人たちと区別するようになった。

2.　沖縄では尚清王の時代に神事を掌る王女聞得大君(チフィヂンウドン)が霊地久高島に参詣の途中暴風にあい、薩摩国に漂着した。薩摩では美貌の王女が流れついた噂が広まり、城主は是非にと王女を望まれた。王女は驚き右手の小指を食い切り、手紙をしたためて、当時薩摩に滞在中だった国頭親方正格に助けを求めた、親方は思案の末王女の手に入墨をした。やがて午前に召されたが、城主は王女の手の入墨をみてのぞまれることをあきらめ、王女を返された。…この故事にちなみ、女が結婚したら貞操を全うするようにと入墨をするようになった。

3.　八重山では船で帰国を急ぐ人たちが暴風にあい、漂流して人食い島の海岸の暗礁に乗りあげ、食人種の襲来をうけた。船人たちは船を動かそうとあせったがどうにもならなかった。その時鈴状の笠をかぶり、手に入墨をした婦人があらわれて船を押し出してくれたので命が助かり島に帰ることができた。そこでその女の恩を忘れぬため、婦人たちに入墨をさせた。

4.　黒島では昔大新城親方の一行が、首里から八重山へ向かう途中、針路をあやまり南洋に着いた。そこは泥海であったため、船は沈没しそうになった。だんだん沈んで行くうち海底を見ると、手に入墨をした女と入墨のない女が争っている。手に入墨をした女は船が沈まぬように上に押し上げ、入墨のない女は船を海底に沈めようとしていた。そのうち船底の釘がぬけてこわれそうになった時、釘のぬけた穴の中に尻高貝が入って釘の代わりをしてくれた。…入墨をしていた女は航

海の神で、その恩を忘れぬために、女たちに入墨をさせた。

5.　昔、ある人が八重山から沖縄に旅する途中、難船して天の根まで行ってしまった（天の根とはずっと南の方だという）。そこはヤラドル（濁海）で船は沈みかかった。その時女の兄弟の魂の手が現れて船をもち上げてくれ、船底を食う虫がいて釘を抜くと、抜けた穴に高瀬貝が入って代わりをつとめてくれたので無事に帰ることができた。船人たちは故郷に帰ってその魂の手にあった入墨と同じ模様を姉妹の手に入墨し、兄弟たちは高瀬貝の形をした笠を「クバ」の葉で作り、冠らせることにしたという。

なお、奄美では２と３の伝説が『奄美大島婦人の入墨研究』に紹介されており、入墨が沖縄から伝来したという推定があることも指摘しておきたい。

奄美の地政学的かつ生活的な習俗から把握しようとした山下文武氏の視角を重視することで、谷川健一の南島文化・文学論の再検討も視野に入れつつ、今後の研究を進めていきたい。

表象としての同性愛――『仮面の告白』とLGBT

柴田勝二（東京外国語大学 大学院国際日本学研究院）

三島由紀夫の出世作として知られる『仮面の告白』を中心として、三島文学における同性愛表象の特質を探るとともに、より近年における同質の主題をはらむ作品に眼を向け、現在問題化されている LGBT との関わりをも考察するという内容の講義をおこなった。

『仮面の告白』は 1949 年に発表され、三島を広く表現者として知らしめる契機となった重要な作品である。この作品は異性を愛することができない少年として育った語り手が、中学校時代に近江という年上の同級生に「恋」をし、その後戦争時に知り合った園子という女性とありふれた異性愛の関係になるものの、異性に欲望を感じることができない自身の資質のために結局彼女とは離別に至ってしまうという展開をもっている。

『仮面の告白』が同性愛を主題とする作品であることはごく自明のように見えながら、自身が前半部分で語るような宿命的な同性愛者であるならば、そもそも園子と異性愛の関係に入るはずがないという矛盾をはらんでいる。けれども三島――語り手のなかにある動機としての基調は、現実世界を生き抜く生命感の欠如であり、それを回復しようとする強い志向である。近江は自身にはない生命の力を漲らせた存在として語り手の「私」を引きつけるのであり、またその欠如ゆえに彼は園子との異性愛を成就させるに至らないと考えることができる。本作品において同性愛と異性愛が反転する様相を呈しているのはそのためであり、破綻した異性愛を正当化するべく、同性愛者の「仮面」が求められているのである。

その 3 年後に発表された『禁色』は、『仮面の告白』とは違って同性に憧れるというよりも、異性愛と同性愛のどちらの世界にも生きうる美青年を主人公とし、現実に彼が同性と性的な交わりを交わしもする様相を描いている。こうした現実を超越しうる強者的な人物を描くことがこの時期の三島の傾向として見られるが、この作品では同性に牽引される情動が希薄であるために、主人公は同性愛の主体というよりも「男色家」としての性格を強く帯びている。

文学における同性愛表象について考える際に、『仮面の告白』の「私」を動かしているような憧憬の感情は重要な意味をもっている。とくに吉屋信子の『花物語』や谷崎潤一郎の『卍』といった、大正から昭和初期の時代に現れる女性間同性愛を主題とする作品においては、しばしばこの感情が基調をなしている。すなわちこうした作品においては、女性の美が社会的な価値を高め、また「玉の輿」以外にも前代に比べれば社会における女性の自己実現がある程度可能になってきた時代を背景として、そうした資質を持つ女性を自身の指針として生きようとする情動が、同性への憧憬という形を取り、さらには性的な愛着さえ派生させることが自然に起こってくる様が描かれるからである。

こうした傾向は現代文学にも受け継がれ、松浦理英子の『ナチュラル・ウーマン』では、同性

に性的に惹かれることを自然な情動として受け止める女性が描かれる。これらの作品は、同性に対する憧憬の感情が性的な色合いを帯びた地点に同性愛が発生する機構をよく示しているといえるだろう。『仮面の告白』はこの機構を原理的な形で物語っている作品とも見なされる。こうした関係が男性間よりも女性間で起こりがちなのは、社会的な自己実現の競争の主体となることが、女性よりも男性の方により強く想定されるために、優れた資質を持つ同性は男性にとっては憧れよりも敵意や競争心の源泉となりやすいからであろう。それに対して女性にとっては、近代においても社会的地平での自己実現から遠ざけられがちであったために、それをなしうる可能性をはらんだ女性は同性に同士的な共感をもたらす契機ともなる。

こうした機構はフロイトの同性愛理論からもうかがわれる。フロイトは同性愛を発生させる機縁として、自己愛の外部への投影に加えて同性に対する競争意識の脱落を挙げているが、男性間よりもむしろ女性間の同性愛を描く作品の方が、女性の社会的地位の相対的な低さと相まって、競争意識の希薄さを契機とする同性愛の様相を提示することが少なくないのである。反面対象を競争の地平に置いて眺める眼差しは同性愛的な心性を阻害する装置として機能しやすい。その点でも『仮面の告白』は示唆的な作品で、語り手の「私」は前半部分では完全な同性愛者のように一見見えながら、実は異性愛的な心性をはらんでおり、それが後半の園子との異性愛関係の伏線ともなっている。彼が異性に惹かれないと語りながらも、松旭斎天勝という女性奇術師に魅惑を覚えるのはその一端をなしている。また中学校時代､近江が鉄棒で力強い懸垂を繰り返す様を見て、彼への「愛を自ら諦めたほどの強烈な嫉妬」を抱くのは、「私」のなかにある異性愛者的な資質が近江を競争の地平に置いたうえで、自身の敗北を痛感させられたからにほかならない。

もちろん同性への憧憬を動機としない肉体的交渉としての同性愛関係が表象される文学作品も少なくない。比留間久夫の『YES・YES・YES』では、男娼として客に体を売る青年の話が語られるが、彼にとっては同性との交渉はあくまでも商売であるにすぎず、その点ではこの作品を「同性愛」を描くものとしては見なしがたい。三島の『禁色』の主人公南悠一も同性愛者というよりも男色家というべき性格を持っていたが、この作品では中盤以降、悠一は異性愛者としての自己に目覚めていき、むしろ彼を女への復讐の道具としようとした老作家の檜俊輔の方が悠一への愛着を強めていくというアイロニカルな展開を示しており、やはり同性愛の根底にある情動の形が暗示されている。

現代の LGBT に関する調査では、同性愛の傾向を持つ人びとは、女性の場合は父親から受けた暴力の経験が男性への恐怖や嫌悪をもたらしたことが起点となることが多く、男性の場合は競争社会で自己表現をうまくできないことが原因をなすことが多いようである。こうした心性は人間にとって自然なものであり、これまで文学作品に描かれてきた動機とも連続性を持っている。その連続性に着目することで、一見距離のある文学作品の表象と現実社会における現象としての LGBT を架橋することもでき、そうした包括的な視点から同性愛表象を捉える必要があるだろう。

Mr. Heibon Punch and Mr International: Mishima as a 'MAD' Man

Martyn Smith（ロンドン大学SOAS）

In the 1960s, *Heibon Punch* became one of the most popular weekly magazines in Japan. It was the first weekly magazine aimed at young men and in this lecture, I examined a selection of articles from the late 1960s, a period of violent student protests and international uncertainty, to argue that the importance of *Heibon Punch* can be found in the creation of a commodified urban, male subjectivity. In the pages of *Heibon Punch*, the counter-cultures that were emerging along with the protest movements taking to the streets of the major cities, became firmly embedded within the ideological state promotion of a consumer culture. The government's explicit connection of national development to domestic consumption after the ANPO protests was tied to American military and economic power and was simply one more assault on popular sovereignty. In the pages of *Heibon Punch*, the political nature of the social and economic transformations wrought by high-speed economic growth was effaced by the relentless consumerisation of individual subjectivity. I outlined the magazine's editorial stance and mediatisation of subjectivity, within the broader emergence of an urban, middle-class culture of consumption that served to blur the contours of individual male subjectivity, and was, in many ways, a precursor of neo-liberal subjectivities that emerged full-blown both politically and economically in the 1970s and 1980s. By pressing its readers to decide for themselves how to negotiate the identities, ideas, and goods on offer in its pages, *Heibon Punch* shifted the focus of political subjectivity from the established social and political system to the core of the individual subject.

In November of 1968, *Heibon Punch* carried a special section entitled *Mad Age: Mishima Yukio is Mad!* Next to a picture of a bare-chested Mishima practicing *Bushidō* the article proclaimed the advent of a 'Mad Age' in which Japan had been taken over by a 'decadent mood'. This mood had led to the emergence of a new type of person: the 'Mad Man'. Mishima was a man in his 40s who often removed his clothes to pose naked in the popular media. He was 'obsessed with body-building', 'sang love songs on stage' and 'shared a passionate on-screen kiss with Maruyama Akihiro' (better known nowadays as Akihiro Miwa). On top of this, he was renowned for standing 'in front of masses of students challenging anyone brave enough to come and kill him'. According to the article, no-one understood the spirit of *Bushidō* as much as Mishima Yukio, but this made his 'frivolous actions' all the more difficult to understand. Even more worryingly, he was not the only example from popular culture of men in or approaching middle age who did not abide by the 'usual value judgments of society' (*Heibon*

Punch, November 4th 1968, 36). As former editor Yamato Shiine has noted, Mishima was in many ways the first media created 'Japanese superstar', and *Heibon Punch* played a large role in creating his media image (Yamato, 2007, 9).

After outlining the spectacular growth and popularity of *Heibon Punch*, I discussed the nature of the 1960s shift to consumerism and the promotion of consumer society. Explaining how the magazine was created and aimed at young men I used the above article as well as an article by Nosaka Akiyuki to explain how the magazine created a male subjectivity within the framework of rapid economic growth and the rise of consumerism. This was followed by a discussion session which produced an interesting debate and raised some important points.

CAAS & NINJAL

Consortium for Asian and African Studies

GLOBAL JAPAN STUDIES

「言語・表

大学院 2017 年度冬学期集

	1 月 23 日	1 月 24 日
	「文化の境界とクレオール言語」	「表象と（生）政治」 Visuality and (Bio-)Politics
2 限	ガイダンス	イリス・ハウカンプ Iris HAUKAMP （CAAS・SOAS ロンドン大学） **"Troubling bodies on the silver screen"**
3 限	朝日祥之 ASAHI Yoshiyuki （NINJAL・社会言語学） 「越境した日本語と日本文化」	ベルナール・トマン Bermard THOMANN （CAAS・INALCO） **"Representing occupational health i Japanese campaign posters"**
4 限	文明戴 MOON Myung-jae （CAAS・韓国外国語大学） 「説話から見た文化の境界」	春名展生 HARUNA Nobuo （本学） 「質か量か —20 世紀初頭日本の人口論争」
5 限	フォローアップセミナー	フォローアップセミナー

L 合同セミナー2017

象・文化」

集中講義Ⅰ日程（1/23-26）

履修コード：
530882
（大学院）

NINJAL
国立国語研究所
&
東京外国語大学

	1 月 25 日	1 月 26 日
	「琉球・奄美の言語、歴史、日本語史」	「戦後日本文化と三島由紀夫」
r	木部暢子 KIBE Nobuko （NINJAL・方言学） 「琉球・奄美の言語研究から」	
n	花薗悟 HANAZONO Satoru （本学） 「日本語教育は危機言語教育に寄与できるかー沖縄首里方言を例としてー」	柴田勝二 SHIBATA Syouzi （本学） 「表象としての同性愛 ー『仮面の告白』と LGBT」
	小木曽智信 OGISO Tomonobu （NINJAL・コーパス日本語学） 「万葉集のコーパスと琉球の言葉」	マーティン・スミス Martyn SMITH （CAAS・SOAS ロンドン大学） **"Mr Heibon Punch and Mr International: Mishima as a 'MAD' Man"**
	友常勉 TOMOTSUNE Tsutomu （本学） 「奄美の葬送儀礼について」	フォローアップセミナー

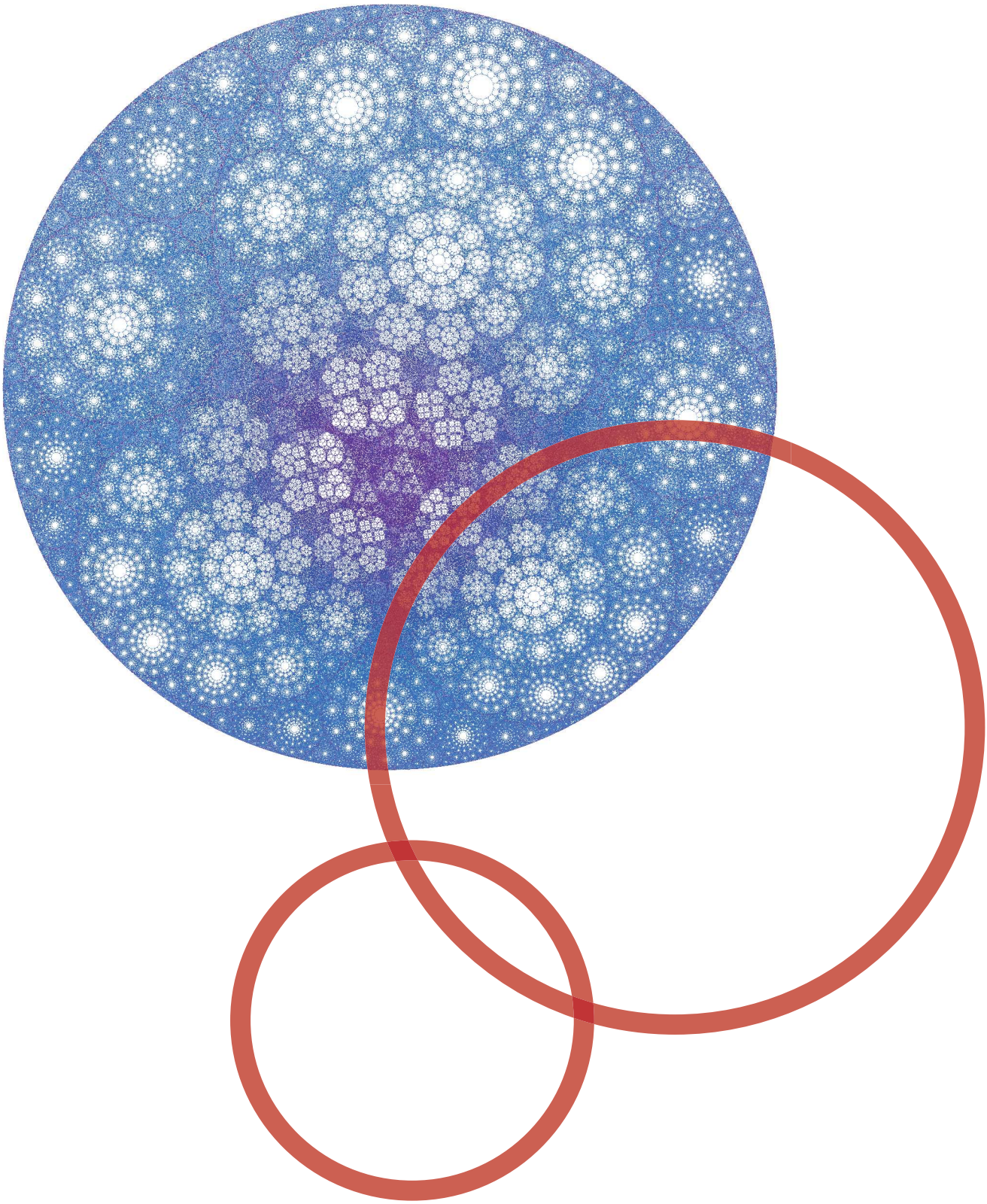
東京外国語大学　国際日本学研究　報告Ⅲ

CAAS&NINJAL 合同セミナー 2017「言語・表象・文化」
CAAS&NINJAL Joint Seminar 2017: Language, Representation, History

---

発　行：2018 年 6 月 30 日
編　集：東京外国語大学　大学院国際日本学研究院　CAAS&NINJAL ユニット事務局
発行者：東京外国語大学　大学院国際日本学研究院　院長　早津恵美子
〒 183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1　アゴラ・グローバル 2 階　国際化拠点室
TEL　042-330-5534
FAX　042-330-5822
Email　caas_admin@tufs.ac.jp

©Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Japan Studies



TUFS Japan Studies

東京外国語大学 大学院
国際日本学研究院
Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies